新長崎学研究センター紀要　第３号（2023年）
長崎外国語大学

【学術論文】

日常語を基礎とした大学生の対人的疎外感の性差に関する研究

長　尾　　博

A study on gender differences concerning feelings of interpersonal alienation based on vernacular during university students

NAGAO Hiroshi

Abstract

The purpose of this study was to investigate gender differences of university students' feelings of interpersonal alienation based on vernacular. Study 1, Wagamama scale was constructed to measure the degree of Japanese self-expression. Study 2, 104 Japanese, 87 Chinese, and 62 Korean female students were administered to Wagamama scale. As a result, this scale confirmed Japanese original self-expression scale. Study 3, Male students' feelings of interpersonal alienation were influenced by self-display and modification of self-expression, while the interaction between amae & complaints and sensitivity to others influenced female students' feelings of interpersonal alienation.

キーワード：大学生の対人的疎外感，性差，日本的自己表明

はじめに

本研究は，日常用語[(1)]を基盤として大学生の対人的疎外感（interpersonal alienation）の性差を明らかにするものである。青年期は他者と親しい関係を今のまま維持したい気持ちと同時に自分らしさを出したいという自己主張（self-assertion）欲求の葛藤が存在するといわれている（遠藤，1997）。この自己主張欲求は，自己表明（self-expression）と他者配慮（consideration for others）の２要因で構成されている（柴橋，2001；渡部，2006）。とくに自己主張と適応（adjustment）との関係は，古くから取り上げられているが（Wolpe，1958），日本人は従来から非主張性が強いことがあげられており（高濱・沢崎，2012），周囲との和を保つために自己主張を控えることを

よしとし，自己主張が強ければ和からはぐれて不適応状態に陥りやすいととらえられてきた（榎本, 1995）。

また，宮下・小林（1981）による中学・高校・大学生を対象とした調査研究からすでに不適応と対人的疎外感との関係が明らかにされているものの，とくに最近の臨床領域においては，この対人的疎外感と不適応との関係が注目されている。例えば，わが国では，無気力（赤枝，2013），いじめ（中山，2013），ひきこもり（竹中，2010），自殺（相羽・太刀川・Lebowitz，2019），発達障害（国立特別支援教育研究所，2012）などの報告があげられ，最近の諸外国における対人的疎外感に関する研究では，対人的疎外感と自殺（Barzilay et al., 2015）や対人的疎外感と暴力（Yalch & Levendosky, 2016）などの研究がある。

このような臨床領域の現状をふまえて，現代のわが国の健常青年の友人関係の特徴はどうであろうか。岡田（2007）は，伝統的な友人関係である「個別関係型」，現代的な友人関係の形として「群れ志向型」と「関係回避型」をあげている。このうち「関係回避型」は一定の割合であるととらえ（岡田，2016），「群れ志向型」は増加傾向にあるという（白井・大谷，2017）。しかし，中学生・高校生の不登校は増加傾向であり（文部科学省, 2020），大学生の不登校も増えているという（水田他, 2010）。「群れ志向型」が増加傾向にありながら不登校の青年が増加傾向にあるという矛盾について，小松（2016）による大学生の中学生時の不登校経験の回顧面接においてグループから疎外されたことが不登校のきっかけであるという結果や，大塚・穴水（2018）による大学生の面接から，居場所のない「生きづらさ」を感じている大学生が多いという結果に基づけば，現代では群れからはぐれて対人的疎外感をもつ青年が増えているのではないかと思われる。対人的疎外感とは，社会や周囲の人との関係の中で生じる孤独感や不信感と定義されている（杉浦，2000）。

しかし，この対人的疎外感を全く感じていないということについて社会的な問題があると思われる。社会学者のMills（1959）は，「陽気なロボット」という語で楽観的で社会的なことに関心がなく，長いものには巻かれろという対人的疎外感を全く感じていない青年がもつ社会的な責任感の欠如の問題を指摘している。中山（2012）は，大学生の調査から対人的疎外感を感じていない学生がもつ政治的関心の欠如を明らかにしている。心理学的には，対人的疎外感を全く感じていない青年は，群れ志向の者が増えているなかで（白井・大谷，2017），強い自己主張を避け，表面的な交流の者が多い（上野・上瀬・松井・福富，1994；和田，1990）のではないかと思われる。
杉浦（2000）による青年期の対人的疎外感の研究では，対人的疎外感を感じている者は，男子の場合，高校生の方が中学生よりも多く，女子の場合，高校生の方が大学生よりも多く，大学生の場合，学年差はなく，性差があることが明らかにされている。

大学生の対人的疎外感，自己表明，他者配慮の3つの関係に関する研究では，渡部（2006）の研究では，強すぎたり，弱すぎたりの極端な他者配慮は，対人的疎外感を含んだ精神的不健康状態が生じやすいことが，一方，鈴木･新井（2014）の研究では，対人的疎外感は，他者配慮よりも自己表明の程度が影響し，自己表明が強いほど対人的疎外感が弱いことが明らかにされている。このような対人的疎外感に対して他者配慮が影響しているか，自己表明が影響しているかの相違は，性差によるものではないかと思われる。その根拠として，大学生を対象とした和田（1993）の友人関係の性差に関する研究では男子は，達成，競争，独立心が強く，女子は，暖かさ，親密感が強いことが明らかにされ，松並（2014）による大学生の自己愛（narcissism）の性差に関する研究では男子は，誇大自己[(2)]（grandiose self）が強く，女子は，他者評価に過敏であることが明らかにされていることがあげられる。以上のような研究結果をもとに本研究では，大学生の対人的疎外感に関して男女別に自己表明が強く影響しているのか，他者配慮が強く影響しているのか，それとも自己表明と他者配慮の相互作用が影響しているのかを明らかにすることにした。

ところでヒトの思想は，とくにことばによって表現され（大野，1974），ことばの意味は，文化の影響が強いといわれている（鈴木，1973）。鈴木（1973）は，ことばがもつ「見えない文化」を重視し，日本的現実をはかる尺度は日本語自体にあるといっている。例えば，日本語の「水」は英語では「water」というが，「water」には「冷えた水」と「湯」という意味があり，また，イギリス人は，「馬」という語に含まれる意味には日本人が「犬」を可愛がるような意味を含んで表現し，日本語の「察しがつく」という語は，欧米人は翻訳できない点をあげ，日本語は，自己規定の対象依存的な構造があるといっている。Seeman（1959）も対人的疎外感の研究において国の違いという文化的視点が必要であるといっている。本研究では，このような鈴木（1973）やSeeman（1959）の見解にたって対人的疎外感に影響を及ぼす要因について日常用語を用いて明らかにすることにした。

自己表明の国際比較に関して，高濱・沢崎（2012）は，日本人の非主張性をあげ，林（1990）による日本，韓国，中国の大学生を対象とした比較調査では日本人学生は，韓国人学生よりも明確な自己表明をしないことが，また，松本（1987）の中国人と日本人との成人比較調査では，中国人の方が日本人よりも自己表明が強いことが明らかにされている。伊藤（2001）は，日本人は，「場」による縛りがあり，思ったことをはっきりいうと「わがまま」な人とみられる傾向があり，日本人独自の自己表明尺度の作成の必要性を強調している。

自己表明について，わが国では古くから用いられている日常用語として「わがまま」[(3)]ということばがある。茨木（1987）は，わがままという語と土居（1971）の受身的

対象愛という意味をもつ「甘え」という語との区別が明確にはつきにくいといっている。わがままとは，第1に自分の思うままにすることという意味があり，第2の意味として他者や周囲の事情をかえりみず自分勝手にふるまうことがあり，また，第3に思うままに贅沢に尽くすことの意味がある（広辞苑，1955，p 1751）。本研究では，わがままという語をわが国独自の自己表明に用いることばととらえ，その質問紙尺度を作成することにした。

一方，他者配慮について，土井（2008）は，今日の青年は友人関係の衝突を避け，とくに同調行動をとるために「空気を読む」[(4)]という特徴をあげている。「空気を読む」という語は，山本（1977）が，平安時代からある非言語的交流によってその場の状況を察する人間関係の特徴としてあげたことばである。中国と日本との女子大学生の比較調査から日本の女子大学生の共感性の高さが示され（一二三，2006），韓国と日本の大学生の比較調査から日本の大学生の他者配慮の強さが示されている（目黒・會澤・呉・黄・孟・孫，2017）。鍋倉（1997）やGelfand, Nishii, & River（2006）は，集団の空気を読むことはわが国独自の文化であるといっている。また，万代（2004）は，空気を読むという語は，Snyder（1974）のいうセルフモニタリング（self-monitoring）と同じ意味であるといい，国語辞典での定義内容とも一致しており（大辞泉，2012，p 1008），また，大石（2009）や日高・小杉（2012）の空気を読むという語のイメージや意味の分析結果からも空気を読むという語は，セルフモニタリングという語の同意語としてとらえられている。セルフモニタリングとは，対人場面において状況や他者の行動を観察し自己表出や自己表明が社会的に適切かを考慮して自分の行動を統制することと定義されている（Snyder,1974）。このようなことをふまえて，本研究では，日本人独自の他者配慮をセルフモニタリングすることととらえた。

本研究の目的は，第1の目的として，わが国独自な自己表明のとらえ方としてわがままという語を取り上げ，わがまま尺度を作成し，この尺度による国際比較を行い，わがままという語に含まれるわが国独自の自己表明の仕方を検証すること，第2に対人的疎外感を全く感じていない大学生は，対人関係が表面的かどうかを検証すること，第3に男女別に対人的疎外感に関して，わがままの強さが影響しているのか，セルフモニタリング能力の欠如が影響しているのか，それともわがままの強さとセルフモニタリング能力の欠如の相互作用が影響しているのかを明らかにすることとした。研究目的の便宜上，研究1では，わがまま尺度を作成し，研究2では、この尺度の国際比較を行い，研究3では，目的3を行うことにした。

1．研究1

目　的

わがまま尺度を作成し，その信頼性と妥当性を検討する。

方　法

項目作成　20XX年11月に予備調査としてわがまま尺度の質問項目の選定については，国立大学教育学部2年生男子42名と女子47名に対して既述した広辞苑の「わがまま」の定義を書いた用紙を配布して調査実施の同意を得た後,「日常生活において『わがまま』の程度を問うわかりやすい質問項目をつくってください」と教示して書いてもらった。その結果の重複がないかをチェックし31項目が選定され，それを日本語教育を専攻する教員に定義に即しているか，問いやすい適切な表現かをチェックしてもらった。その結果，25項目が選定された。この質問項目を「全くあてはまる」の5点から「全くあてはまらない」の1点までの5件法で20XX年3月に九州圏の国立大学工学部3年生男子98名（M=21.87歳，SD=1.11）と私立大学社会福祉学部3年生女子104名（M=21.44歳，SD=1.07）に実施した。その再検査は，20XX年4月に同じ対象に（男子92名と女子102名）実施した。また，同時に尺度の基準関連妥当性を検討するために谷（2000）の甘え尺度の下位尺度の屈折的甘え尺度（9項目),柳井・柏木・国生（1987）の新性格検査尺度の下位尺度の自己顕示性尺度（10項目），鈴木・木野（2008）の多次元共感性尺度の下位尺度の自己指向的反応尺度（4項目）を実施した。3つの尺度は,「全くあてはまる」の5点から「全くあてはまらない」の1点までの5件法で得点化し，得点が高いほどその傾向が強いととらえる。これら4つの尺度の教示は,「大学生活で日頃のあなたの対人関係の特徴について答えてください」とした。回答は，無記名であり，プライバシーは保護されること，調査以外は使用しないこと，実施は強制されるものではないことを説明し，調査対象の同意を得て実施した。

結　果

探索的因子分析の結果　広辞苑の「わがまま」の3つの意味から3因子を想定し，25項目の回答に対し探索的因子分析（最尤法・プロマックス回転）を実施した。.40未満の低い負荷量の2項目を除き，最終的に23項目が選定された。固有値の減衰状況（22.11，7.98，6.55，0.97・・）や平行分析，解釈可能性より，3因子解が妥当であると考えられた。適合度指標は，CFI=.94，RMSEA=.05，AIC=403.66，BIC=589.76であった。各因子の因子負荷量はTable1の通りであった。各因子の命名は，1名の心理学者とともに検討した。第1因子は，茨木（1987）が甘えとわがままという語の区別がつきにくい点を指摘していることを参考にして質問内容から,「甘

えと不満」と命名した。第2因子は，人前で目立ちたい欲求が示されているため「自己顕示性」と命名した。第3因子は，他者の気持ちや立場に配慮がない内容が示されているため「思いやりの欠如」と命名した。尚，因子として，「わがまま」の意味の思うままに贅沢を尽くすことがないのは，大学生を調査対象としたために日常生活で思うままに贅沢を尽くす経験は稀なためであるからととらえた。また，性差に関しては，性差がないことが示された（男子；M=65.22，SD=11.67，女子；M=64.98，SD=10.78，t（201）=0.22，ns）。

信頼性の検討　内的一貫性は，α係数が第1因子が，.87，第2因子が，.82，第3因子が，.73であり，ほぼ内的一貫性がある結果であった。また，1か月後の再検査との相関係数は，Table2の通りであり，再検査信頼性が得られた。

基準関連妥当性の検討　わがまま尺度の基準関連妥当性を検討するためにわがまま尺度得点と屈折的甘え尺度得点，自己顕示性尺度得点．自己指向性反応尺度得点との相関係数を算出しTable3に示した。

考　察

わがまま尺度の信頼性に関して，再検査法の結果や各因子ごとのα係数からほぼ満足のいく内的一貫性が得られた。また，基準関連妥当性に関して，Table3の相関係数から十分な妥当性がとらえられた。

２．研究２

目　的

作成されたわがまま尺度は，高濱・沢崎（2012）や伊藤（2001）がいう自己表明を明確にはしないというわが国独自の文化的内容をふくんでいるのかを明らかにするために，既述した林（1990）による日本，韓国，中国の大学生の調査から日本の学生は，韓国の学生よりも自己表明を明確にしないことや松本（1987）による日本と中国の成人の調査から日本人は，中国人よりも自己表明が弱いことが明らかにされていることを参考にして日本，韓国，中国の女子大学生にわがまま尺度を実施して比較検討を行う。

方　法

調査対象と手続き　調査対象は，林（1990）と松本（1987）の結果に基づき日本，韓国，中国の女子大学生とした。日本に留学している韓国と中国の留学生各3名にわがまま尺度を母国語に翻訳してもらい，その後，異なる3名の留学生に逆翻訳をしてもらった。その結果を照合して翻訳文のわがまま尺度を作成した。研究1と同様の教示で韓国の総合大学の文科大学国語国文科と韓国史学科の2年生女子62名（M=19.35

歳，*SD*=0.78），中国中央部の省に位置する総合大学の人文学院外国文学系の2年生女子87名（*M*=19.21歳, *SD*=1.97）に授業後の空いている時間を借りてインターネットで調査をした。欠損値と全ての項目に答えていないデータは除外した。調査対象には，調査は無記名であり回答は任意であること，回答の拒否や中断は可能であり，そのことに不利益は生じないこと，調査の回答をもって調査への同意とみなすことなどを文書により説明した。調査は，20XX年7月から8月にかけて実施した。

結果と考察

わがまま尺度得点に関して，研究1の20XX年3月に実施した女子大学生の平均値と研究2の韓国と中国の女子大学生の3大学間の平均値の一元配置の分散分析結果をTable4に示した。分析の結果, わがまま尺度合計得点に関して有意差が認められた（F=（2，252）=4.68，p<.01）。さらにScheffe法による多重比較を行ったところ，中国と韓国間に有意な差はなかったが，日本と韓国，日本と中国とに有意な差が認められた（p<.01）。韓国，中国，日本の順で得点の高さが示された。また，各下位尺度の3大学間の平均値の分散分析の結果においても有意差が認められ，Scheffe法による多重比較の結果，どの下位尺度においても2つの大学間に有意差が認められた。甘えと不満に関しては，日本，中国，韓国の順に高く，自己顕示性に関しては，韓国，中国，日本の順に高く，思いやりの欠如に関しては，中国，韓国，日本の順に高いことが明らかにされた。

Table4の結果から，わがまま尺度で測定したわがままについての文化差がとらえられた。まず，甘えと不満に関して，土居（1971）が，甘えをわが国の国民的特性の1つとして取り上げていることやMarkus & Kitayama（1991）のいうわが国の相互協調的自己の影響から，中国，韓国の女子大学生と比較して日本の女子大学生は甘えを表現しやすいことが示唆された。また, 自己顕示性に関して, 超・松本・木村（2009）による日本と韓国の大学生の比較調査からも韓国の大学生の方が日本の大学生よりも自己顕示性が強いことが示されており，本研究の結果と一致した。また，思いやりの欠如に関して，一二三（2006）による日本と中国の女子留学生の比較研究，目黒他（2017）による日本と韓国の留学生の比較調査からもわが国の女子大学生の共感性は高いことが示されており，本研究の結果と一致した。このようなことから，わがまま尺度によって「場」による縛りから自己表明を明確にしないという文化的背景をもつ自己表明のあり方が測定できることが示唆された。

３．研究３

目　的

対人的疎外感を全く感じていない大学生は，対人関係が表面的かどうかを検証し，男女別に対人的疎外感に対してわがままの程度か，セルフモニタリング能力の欠如か，それともわがままの程度とセルフモニタリング能力の欠如の相互作用が影響しているのかを明らかにする。

方　法

調査対象と用いた尺度　調査対象は，九州圏の私立大学工学部2年生男子（*M*=19.20歳，*SD*=1.44）の156名と私立大学社会福祉学部2年生女子（*M*=19.30歳，*SD*=1.26）の148名であった。以下の3つの質問紙尺度は，杉浦（2000）による大学生活で普段一緒に行動しやすい所属成員の数の調査から5名から6名程度であること，また，荒川・吉田（2011）による大学生活で対人的疎外感を感じやすい場面として食行動場面が明らかにされていることを参考にして「大学での昼食時，5～6人の仲間と一緒にいることを前提にしてあなたは，次のどのような感じや行動をとりやすいか答えてください」と教示して実施した。回答は，無記名であり，プライバシーは保護されること，調査以外は使用されないこと，実施は強制されるものではないことを説明し，調査対象に同意を得て行った。調査時期は，20XX年10月に大学で授業を借りて一斉に実施した。実施した尺度は，研究1で作成したわがまま尺度，また，疎外感を測定する尺度として宮下・小林（1981）の尺度があるが，この尺度は社会的疎外感も含む対人的疎外感以外の因子で構成されているため，杉浦（2000）の21項目で「あてはまる」の5点から「あてはまらない」の1点までの5件法の対人的疎外感尺度を用いた。また，空気が読めることの測定を万代（2004）の見解に基づき石原・水野（1992）の13項目からなる「非常にあてはまる」の6点から「全くあてはまらない」の1点までの6件法のセルフモニタリング尺度を実施した。この尺度は，Lennox & Wolfe（1984）の尺度を翻訳し，改訂したものである。下位尺度として，「他者の表出行動への感受性」と「自己表明の修正能力」がある。セルフモニタリング尺度は，ほかにも岩淵・田中（1987）によるものがあるが石原・水野（1992）によるものの方が妥当性が検証されているためこの尺度を用いた。尚，質問の原文内容を変えず，質問教示内容に即して，対人的疎外感尺度とセルフモニタリング尺度の質問文に若干の修正をした。

結果と考察

Table5に各尺度の平均値と相関係数を示した。対人的疎外感は，性差はないことが示された。杉浦（2000）の結果では，男子の方が高いことが明らかにされているが，

椎名・新井（2016）の調査では性差はないことが示されている。この結果の相違について本研究では，質問教示を5～6人の仲間と大学での食行動場面と明確に場面を設定したことによるものではないかととらえた。今後は，場面の違いによって対人的疎外感の差が生じやすいのかを明らかにしていく必要がある。また，わがまま尺度得点は，研究1の結果と同様に性差は示されなかった。また，セルフモニタリング得点は，女子の方が男子よりも高いことが示された（$p<.05$）。諸井（1987）の結果でも女子の方が男子よりもセルフモニタリング得点は高い傾向が示されている（$p<.10$）。対人的疎外感とわがままとの関連は，男女とも有意な正の相関が示された。しかし，鈴木・新井（2014）による対人的疎外感と自己表明との相関は，負の相関が示されている（$p<.01$）。この結果の相違は，日本的自己表明のわがまま尺度と鈴木・新井（2014）の研究では，心理学用語に基づく柴橋（2001）の自己表明尺度を用いたという尺度の違いから生じているととらえた。とくにわがまま尺度の下位尺度得点と対人的疎外感尺度得点の相関をみていくと男女とも対人的疎外感と思いやりの欠如とに正の相関がみられた。これは，研究2で示された日本人の他者を思いやる気持ちを重視する特徴と関連していると思われる。また，対人的疎外感は，男子では自己顕示性とに負の相関が，女子では甘えと不満とに正の相関がみられた。この違いは，他者や集団に対しての関わり方の性差から生じているととらえられる。つまり，男子は，他者や集団に自己を表明することを重視し，女子は，甘えれるかどうかを重視するという関わり方の違いであると思われる。また，対人的疎外感とセルフモニタリングとの相関は，女子の場合，正の相関が示された（$p<.01$）。鈴木・新井（2014）の研究では，対人的疎外感と他者配慮との相関はないことが示されているが，薄・浅岡・逸見・田中（2015）による居場所と感覚感受性（sensitivity）との関連に関する研究では，感受性が強いほど対人的疎外感を感じやすいことが明らかにされていることを参考にすると女子の場合，セルフモニタリングでのとくに他者の表出行動への感受性が，対人的疎外感に影響していることがとらえられた。一方，男子の場合は，対人的疎外感と自己表明の修正能力と正の相関が示され，男子は，その場を察していかに自己表明するかを重視しているかがとらえられた。また，わがままとセルフモニタリングとの相関はないことが示された。このことから，日本的な自己表明であるわがままと空気を読むこと，つまりセルフモニタリングとは関連のない個別要因であることがとらえられた。江口・濱口（2015）による小学生を対象とした研究結果では自己表明と他者配慮とは強い相関が示されているが本研究の大学生の結果では双方の相関がなかったことは大学生ともなると自我が発達し，自己表明と他者配慮とは個別に発達していくことがとらえられた。

対人的疎外感を全く感じていない大学生の特徴　対人的疎外感を全く感じていない

大学生の特徴を明らかにするために対人的疎外感尺度得点が，21点の者（全ての項目であてはまらないと答えた者）を抽出した。その結果，男子32名（全体の21%）と女子37名（全体の25%）が抽出された。この結果は，中山（2012）の大学生の調査結果で251名中60名（全体の24%）が全く疎外感を感じていない結果とほぼ同様の割合であった。対人的疎外感を全く感じていない群とそれ以外の群の2群に分け，わがまま尺度とセルフモニタリング尺度の平均値の比較をTable6に示した。Table6より，わがまま尺度は，男子の場合，対人的疎外感を全く感じていない群の方が，感じている群よりも得点が高い傾向がみられ，女子の場合，その逆の得点が低いことが示された。また，セルフモニタリング尺度得点は，対人的疎外感を全く感じていない群は，男子の場合，自己表明修正能力が乏しく，女子の場合，他者の表出行動への感受性が乏しいことが明らかにされた。この結果から，対人的疎外感を全く感じていない男子学生は，自己主張性は強いが場に応じた適切な表現力が乏しいという特徴が，また，対人的疎外感を全く感じていない女子学生は，自己主張性が乏しく，仲間に深く関わらないものの受身的に順応している特徴がとらえられた。このような特徴から，対人的疎外感を全く感じていない大学生は，対人関係は表面的であることが明らかにされた。対人関係が表面的であることは，他者や集団に順応しているもののその個人や属している集団や個人の成長が生じないという問題点がある。

対人的疎外感に及ぼしている男女別の要因　Table5より対人的疎外感とわがまま，セルフモニタリングとの相関結果から，男子の場合，対人的疎外感と自己顕示性の乏しさと自己表明の修正能力の強さの2つの要因が，女子の場合，甘えと不満の強さと他者の表出行動の感受性の強さの2つの要因が有意な相関があることが示された。そこで男女別に対人的疎外感に対して各2要因がどのように影響を及ぼしているか対人的疎外感を従属変数として，男子の場合，自己顕示性と自己表明の修正能力の2つを説明変数，女子の場合，甘えと不満，他者の表出行動の感受性の2つを説明変数とした階層的重回帰分析を行ってみた。

Table7は，多重共線性を防ぐために各尺度の得点から平均値をひいた中心化を行って男女別に階層的重回帰分析を行った結果である。男子の場合，ステップ1では，自己顕示性及び自己表明の修正能力を投入した。その結果，自己顕示性（β =.-30, p<.01），自己表明の修正能力（β =.20，p<.05）の主効果が示され，ステップ2では，自己顕示性×自己表明の修正能力の交互作用項を投入した。その結果，交互作用は有意ではなかった（β =.01，*ns*）。このことから，男子の対人的疎外感は，自己顕示性の乏しさの影響力が強く，次いで自己表明の修正能力の強さが影響していることが明らかにされた。この結果から，男子大学生の人前でよりよく認められ自己表明できることにこだわり，このことが困難なために対人的疎外感を感じることがとらえられた。

この結果は, 杉浦（2000）の男子大学生の調査で対人的疎外感とSipley & Veroff（1952）のいう他者からの拒否に対する恐れである拒否不安（sensitivity to rejection）とが正の相関を示した結果と関連していると思われる。

一方，女子の場合，ステップ1では，甘えと不満及び他者の表出行動の感受性を投入した。その結果, 甘えと不満（β =.08, p<.05), 他者の表出行動の感受性（β =.26, p<.01）の主効果が示され，ステップ2では，甘えと不満×他者の表出行動の感受性の交互作用を投入した。その結果，甘えと不満の主効果（β =.07，p<.05）と他者の表出行動の感受性の主効果（β =.25，p<.01)，及び交互作用（β =.12，p<.05）が有意であった。交互作用が有意であったため，単純傾斜の検定を行ったところ，強い甘えと不満の者の他者の表出行動の感受性の単純主効果は，β =-.33（p<.01)，弱い甘えと不満の者の他者の表出行動の感受性の単純主効果は，β =.20（p<.05)，強い他者の表出行動の感受性の者の甘えと不満の単純主効果は，β =-.17（p<.05)，弱い他者の表出行動の感受性の者の甘えと不満の単純主効果は，β =.15（p<.05）であった。このことから，甘えと不満が強い者のうちで他者の表出行動の感受性が弱い者, 他者の表出行動の感受性が弱い者のうちで甘えと不満が強い者が，対人的疎外感が強いことがとらえられた。この結果から，女子大学生では，他者や集団に深く関わろうとして甘えが満たされない場合，対人的疎外感を感じることがとらえられた。この結果は，杉浦（2000）の女子大学生の調査結果で対人的疎外感と親和動機（affiliation）とが正の相関を示した結果と関連していると思われる。

以上の結果を大学生のコミュニケーション能力を高めるためにどのように役立てたらよいのであろうか。コミュニケーション能力に関して栗田・内野・小島（2012）の大学生の調査結果では，コミュニケーション能力があるという意味を自己表明が上手にできることと理解している者が多いという。しかし，平尾・重松（2007）による大学生の調査結果から,「他者の話を聞く」ことがコミュニケーション能力を高め, それが自己理解につながることが明らかにされている。本研究において対人的疎外感を全く感じていない男子学生は，自己表明修正能力が乏しいことが示されていることを参考にすると男子学生の場合，空気を読み，自己をよりよく表現することよりもまず，他者の話を聞く態度を身に着けることが必要ではないかと思われる。小原･廣瀬･Herman・浅野（2020）による中学・高校生を対象とした調査から，昨今，集団主義よりも個人主義に走る生徒が増えていることが示されていることを参考にすると大学生時よりもむしろ早期に他者の話を聞く態度の学習が必要ではないかと思われる。

一方，女子の場合は，甘えと不満と他者の表出行動の感受性とが相互作用して対人的疎外感に影響していることから，コミュニケーション能力を高めるには他者と親しくなることよりもむしろ自己表明のあり方，とくに渡部（2013）の主張性の条件の

うちで「素直な自己表現」が必要ではないかと思われる。佐藤（2013）による調査で相互依存的よりも相互独立的な女子大学生は，自己表現力があることが明らかにされていることから，日本人特有の「場」の縛りによってわがままであるとみられることにこだわり，曖昧に「ぼかして」（中山，1989）自己表明するよりもむしろ素直で率直な自己表明が必要ではないかと思われる。そのためには，佐藤（2005）がいうように正しく，明確な自己認識形成への努力が重要であろう。

４．全体的考察

本研究の研究１と研究２において，わがままという語には日本人特有の自己表明のあり方が含まれていることが示唆された。また，研究３の対人的疎外感とわがままとの関連，とくに対人的疎外感と思いやりの欠如との関連結果からわがままという語には他者配慮が強い日本的文化内容が含まれていることが示唆された。また，対人的疎外感を全く感じていない大学生は，表面的な対人関係であることが明らかにされた。また，対人的疎外感に及ぼす影響要因について，男子の場合，他者に自分をうまく表現したいというこだわりが，女子の場合，他者と深く関わり甘えたいというこだわりが影響していることが明らかにされた。本研究の結果は，今後の大学生のコミュニケーション能力を高めるために役立つことが示唆された。しかしながら，本研究のような性差研究は，性差別研究につながりやすいという批判がある（Harris, 2003）。しかし，時とともに性差は減少している傾向があり（Twenge, 1997），性差研究結果を男性と女性とが相互に補えることが理想である（Myers & Twenge, 2013）。大学生の対人的疎外感を減少させ適応していくためには本研究の性差結果をどのように活用していくかが今後の課題としてある。また，他にも本研究の問題点は多くある。例えば，研究１では，わがまま尺度は大学生だけを対象にしたこともあってわがままの意味の思うままに贅沢を尽くすという意味が含まれていないこと，研究２では，女子大学生のみを対象にしており，男子学生を対象にしていないこと，また，研究３の結果を一般化していくには，さらに対象数を増やしたり，学部差や学年差もとらえていく必要があるなどがあげられる。

利益相反

本論文に関して，開示すべき利益相反関連事項はない。

注

(1)　日常生活用語の略語。人が社会的生活を営むために日々の生活で使用している用

語をいう（北山　修（監修）2006 日常臨床語辞典　誠信書房）。

(2) 自己を顕示し，自己への映し返し，確認，賞賛，承認などを求める幼児的な自己の状態をいう（Kohut, 1971）。

(3) 語源は，「我のまま」に由来し，平安時代の「蜻蛉日記」に書かれ，本来は女性が男性の自己中心的言動を妬ましく思って用いられた。次の外国語とは幾分異なっている。selfishは，自意識過剰で自分だけの世界という意味があり，egocentricは，損得感情中心で利己的という意味がある。中国語の「自私」は，egocentric,「任性」は，selfishに相当する。韓国語の「ボルソプタ」は，一貫して我を通すという意味がある。

(4) 山本七平（1977）が，最初にあげた用語。わが国にある平安時代からある人間関係の様式。1対1や集団の人間関係において情緒的関係，勢力関係，利害関係などをことば外の表現，とくに社会的，状況的雰囲気を理解して自己調整することをいう。山本（1977）は，「空気を読む」人間関係は，意思決定を歪めさせ，それは誤った判断基準になりやすいと批判した。

参考文献

相羽 美幸・太刀川 弘和・Lebowitz, A.J.（2019）．対人関係欲求尺度と身についた自殺潜在能力尺度の日本版の作成　心理学研究，*90*，473―483.

赤枝 尚博（2013）．都市は人々のパーソナリティに悪影響をもたらすか　年報人間科学，*34*，125―139.

荒川 裕美子・吉田 浩子（2011）．大学生の対人的疎外感と昼食行動　川崎医療福祉学誌，*21*，127―133.

万代 つるえ（2004）．対人状況の違いによる自己呈示と対人不安　甲南女子大学大学院紀要，*2*，27―36.

Barzilay, S. et al.（2015）. The interpersonal theory of suicide and adolescent suicide behavior. *Journal of Affective Disorder, 183*, 68-74.

超 善英・松本 芳之・木村 裕（2009）．公的自己意識と対人不安，自己顕示性の関係への自尊感情の調整効果の日韓比較　心理学研究，*80*，313―320.

土居 健郎（1971）．甘えの構造　弘文堂

土井 隆義（2008）．友だち地獄　ちくま新書

江口 めぐみ・濱口 佳和（2015）．主張性と児童の内的・外的適応との因果関係　心理学研究，*86*,191―199.

遠藤 公久（1997）．交友関係　加藤　隆勝・高木　秀明（編）青年心理学概論　誠信

書房
榎本 博明（1995）．よい性格と悪い性格　児童心理，*49*, 13―21.
Gelfand, M., Nishii, L. H., & River, J. L.（2006）．On the nature and importance of culture tightness looseness. *Journal of Applied Psychology, 91*, 1225-1244.
Harris, J. R.（2003）．A review of sex differences in sexual jealousy, self report data, psycho-physiological responses, interpersonal violence, and morbid jealousy. *Personality & Social Psychological Review, 7*, 102-128.
林 建彦（1990）．日本人，韓国人，中国人の表現構造比較　行動科学研究，*30*，15―42.
日高 美咲・小杉 考司（2012）．空気を読むという表現の社会心理学的研究　山口大学教育学部研究論叢，*62*，139―144.
一二三 明子（2006）．異文化の友人・自他文化評価・自他の行動に対する信念が意識的配慮に与える影響　筑波大学地域研究，*26*，27―44.
平尾 元彦・重松 政則（2007）．大学生のコミュニケーション能力とキヤリア意識　山口大学　大学教育，*4*，111―121.
茨木 俊夫（1987）．学校の中の子どもの甘えとわがまま　児童心理，*41*，841-845.
石原 俊一・水野 邦夫（1992）．改訂セルフ・モニタリング尺度の検討　心理学研究，*63*，47―50.
伊藤 弥生（2001）．日本におけるアサーション像の探究的研究　心理臨床学研究，*19*，410―429.
岩淵 千明・田中 国夫（1987）．セルフ・モニタリング尺度改訂版への試み　日本社会心理学会第28回大会発表論文集．67.
北山 修（監修）（2006）．日常臨床語辞典　誠信書房
Kohut, H.（1971）．*The analysis of the self*. New York；International Universities Press.（コフート, H. 水野 義信・笠原 嘉（監訳）（1994）．自己の分析　みすず書房）
国立特別支援教育研究所（2012）．発達障害と情緒障害の関連と教育的支援に関する研究
小松 藍生（2016）．不登校の状態に関する研究　北星学園大学大学院紀要，*7*，111―129.
栗田 智未・内野 悌司・小島 奈々恵（2012）．大学生のコミュニケーション行動と意識の調査　広島大学保健管理センター研究論文集，*28*，43―49.
Lennox, R. D., & Wolf, R. N.（1984）．Revision of self-monitoring. *Journal of Personality and Social Psychology, 46,* 1349-1364.
Markus, H. R., & Kitayama, S.（1991）．Culture and the self. *Psychological*

Review,98, 224-253.
松本 一男（1987）．中国人と日本人　サイマル出版
松村 明（監修）（2012）．大辞泉　第二版　上巻　小学館
松並 和子（2014）．自己愛の病理性の性差　パーソナリティ研究，*22*，239―251.
目黒 恒夫･曾澤 まりえ･呉 正培･黄 梅英･孟 慶栄･孫 成志(2017)．異文化コミュニケーションにおける大学生の自己開示に関する比較研究　尚絅学院大学紀要，*74*，45―61.
Mills, L. W.(1959). *The sociological imagination.* Oxford; Oxford University Press.（ミルズ，L．W．鈴木 広（訳）（1965）．社会学的想像力　紀伊國屋書店）
宮下 一博・小林 利宣（1981）．青年期における「疎外感」の発達と適応との関係　教育心理学研究，*29*，11―19.
水田 一郎・藤井 純子・石谷 真一・安住 伸子・井出 草平・谷口 由利子（2010）．大学生に見出される不登校・ひきこもりの実態調査と支援に関する研究　厚生労働科学研究総合研究報告，53―55.
文部科学省（2020）．児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸問題に関する調査
諸井 克英（1987）．大学生における孤独感と自己意識　実験社会心理学研究，*26*，151―161.
Myers, D. G., & Twenge, J. M.（2013）．*Social Psychology*．New York：Mcgraw Hill.
鍋倉 健悦（1997）．異文化コミュニケーション入門　丸善ライブラリー
中山 治（1989）．「ぼかし」の心理　創元社
中山 ちなみ（2012）．疎外感について　ノートルダム清心女子大学紀要，*36*，121―145.
中山 万里子（2013）．いじめ経験およびいじめ対策への意識に関する調査　白鴎大学教育学論集，*7*，143―188.
新村 出（編）（1955）．広辞苑　岩波書店
小原 眞知子・廣瀬 圭子・Lo, Herman, H.M.・浅野 伸彦（2020）．青年期における個人主義・集団主義の相違がもたらす家族機能に関する探索的研究　京都大学大学院教育学研究科紀要，*66*，111―122.
大石 千歳(2009)．「空気が読めない」とはどういうことか？　東京女子体育大学紀要，*44*，87―96.
岡田 努（2007）．現代青年の心理学　世界思想社
岡田 努（2016）．青年期の友人関係における現代性とは何か　発達心理学研究，*27*，346―356.

大野 晋（1974）．日本語をさかのぼる　岩波書店

大塚 尚・穴水 幸子（2018）．主観的体験から探る現代の大学生の生きづらさの実態　心理臨床学研究，*36*，166―177.

佐藤 淑子（2005）．大学生の自己主張と自己の発達　発達研究，*19*，65―79.

佐藤 哲康（2013）．大学生のアサーティブな自己表現と文化的自己感　川村学園大学紀要，*24*，141―157.

Seeman, M.（1959）. On the meaning of alienation. *American Sociological Review, 246*，783―791.

柴橋 祐子（2001）．青年期の友人関係における自己表明と他者の表明を望む気持ち　発達心理学研究，*12*，123―134.

椎名 翔太・新井 邦二郎（2016）．ゆるし傾向性に影響する要因ならびに外的適応・内的適応との関連の検討　東京成蹊大学臨床心理学研究，*16*，10―20.

Sipley, T. E. Jr., & Veroff, J .（1952）. A　projective measure of need for affiliation. *Journal of Experimental Psychology, 43*, 349-356.

白井 利明・大谷 宗啓（2017）．現代青年の友人関係は希薄化したのか　心理科学，*38*，1―9.

杉浦 健（2000）．2つの親和動機と対人的疎外感との関係　教育心理学研究，*48*，352―360.

鈴木 孝夫（1973）．ことばと文化　岩波書店

鈴木 有美・木野 和代（2008）．多次元共感性尺度（MES）の作成　教育心理学研究，*56*，487―497.

鈴木 健一郎・新井 邦二郎（2014）．大学生の主張性と適応について　東京成蹊大学臨床学研究，*14*，33―41.

Snyder, M.（1974）. The self-monitoring of expressive behavior. *Journal of Personality and Social Psychology, 30*，526-537.

高濱 怜美・沢崎 達夫（2012）．非主張性の現状と課題　目白大学心理学研究，*8*，63―72.

竹中 哲夫（2010）．ひきこもり支援論　明石書店

谷 冬彦（2000）．青年期における甘えの構造　相模女子大学紀要，*63*，1―8.

Twenge, J. M.（1997）. Changes in masculine and feminine traits over time. *Sex Roles, 36*, 305-325.

上野 行良・上瀬 由美子・松井 豊・福富 護（1994）．青年期の交友関係のおける同調と心理的距離　教育心理学研究，*42*，21―28.

薄 勇樹・浅岡 有紀・逸見 知美・田中 真理（2015）．大学生の感覚感受性傾向が対人

ストレスコーピングならびに居場所感に与える影響　東京成蹊大学臨床心理学研究，*15*，139―145.

和田 実（1990）．青年の対人関係の変容　久世　敏男（編）　変貌する社会と青年心理　福村出版　pp.83―102.

和田 実（1993）．同性友人関係　社会心理学研究，*8*，67―75.

渡部 麻美（2006）．主張性尺度における測定概念の問題　教育心理学研究，*54*，420―433.

渡部 麻美（2013）．主張性の４要件尺度の改編と妥当性の検討　社会言語科学，*16*，96―108.

Wolpe, J.（1958）．*Psychotherapy by reciprocal inhibition*．California；Stanford University Press.（ウォルピ，J．金久　卓也（監訳）（1977）．逆制止による心理療法　誠信書房）

Yalch, M. M., & Levendosky, A. A.（2016）. The influence of interpersonal style on the appraisal intimate partner violence. *Journal of Interpersonal Violence, 31*, 2430-2444.

山本 七平（1977）．空気を読む　文春文庫

柳井 晴夫・柏木 繁雄・国生 理枝子（1987）．プロマックス回転法による新性格検査の作成について(1)　心理学研究，*58*，158―165.

Table 1

探索的因子分析の結果（N=202：最尤法・プロマックス回転）

項目	F1：甘えと不満	F2：自己顕示性	F3: 思いやりの欠如	共通性
思い通りに進まないとひねくれる	.87	.15	.12	.73
ちょっとしたことでもふてくされる	.76	.17	.05	.59
思い通りに進まないとすねる	.75	.04	.01	.64
すぐキレてしまう	.70	.13	.12	.63
感情を抑えきれなくなる	.68	.12	.15	.65
がまんできなくなる	.65	.18	.06	.62
機嫌が悪い時，やつあたりをする	.63	.09	.13	.58
ついいわなくてもいいことをいいやすい	.54	.23	.17	.49
トラブルになる発言をしやすい	.52	.21	.20	.43
他者を押し付けやすい	.48	.15	.14	.42
他者をあてにして頼ってしまう	.44	.19	.12	.40
他者にからみやすい	.43	.13	.05	.39
めだって話したくなる	.14	.78	.18	.43
つい出しゃばってしまう	.13	.74	.16	.42
* 地味にふるまう	-.05	.71	.11	.40
強く自己主張したくなる	.11	.68	.03	.39
リーダーシップを発揮する	.17	.53	.12	.32
おとなしくはしない	.08	.49	.09	.31
* 困っている人の話を聞くと解決したらいいなあと思う	.14	.21	-.78	.33
* 人が，頑張っていると応援したくなる	.12	.16	-.74	.29
他者のことよりまず自分のことを考える	.09	.08	.69	.28
失敗した話に同情はしない	.07	.11	.56	.26
* 悲しんでいるのを見て慰めたくなる	.13	.14	-.53	.25
α係数	.87	.82	.73	
因子間相関	F1	F2	F3	
F1		.44**	.25**	
F2	.44**		.32**	
F3	.25**	.32**		

注）* は，逆転項目を示す
**p<.01

Table 2

わがまま尺度の再検査法の相関分析の結果（N=194）

	甘えと不満	自己顕示性	思いやりの欠如	合計
甘えと不満		.86**	.82**	.90**
自己顕示性			.84**	.81**
思いやりの欠如				.78**
合計				

**p<.01

Table 3

各下位尺度の平均値と３尺度の相関分析の結果（N=194）

	M	SD	α係数	わがまま合計	屈折的甘え	自己顕示性	自己指向性反応
わがまま合計	65.38	11.46	.85		.71**	.51**	.64**
屈折的甘え	25.34	4.37	.78			.43**	.42**
自己顕示性	24.55	4.79	.81				.66**
自己指向性反応	11.46	1.98	.93				

**p<.01

Table 4

わがまま尺度の日本，中国，韓国の平均値の比較

	日本 N=104	中国 N=87	韓国 N=62	分散分析			
甘えと不満	36.11(5.21)	34.52(5.04)	32.01(5.65)	F(2,252)=4.65**	日本＞中国 **	日本＞韓国 **	中国＞韓国 **
自己顕示性	18.06(2.62)	21.51(2.56)	25.22(2.58)	F(2,252)=4.83**	韓国＞日本 **	中国＞日本 **	韓国＞中国 **
思いやりの欠如	9.05(2.10)	13.43(2.18)	12.05(2.24)	F(2,252)=3.11**	韓国＞日本 **	中国＞日本 **	中国＞韓国 **
わがまま合計	63.18(10.78)	68.72(12.66)	69.35(13.14)	F(2,252)=4.68**	中国＞日本 **	韓国＞日本 **	

注）（　　）は，標準偏差を示す
**p<.01

Table 5

対人的疎外感，わがまま，セルフモニタリング尺度の平均値の性差と各下位尺度間の相関分析の結果（N=304）

	α係数	男子	女子	t 値	対人的疎外感	甘えと不満	自己顕示性	思いやりの欠如	わがまま合計	自己表明の修正能力	他者の表出行動の感受性	セルフモニタリング合計
対人的疎外感	.78	47.72	48.89	1.04 *ns*		.20*	-.25**	.23*	.22*	.17	.34**	.19
		(14.65)	(13.21)			.31**	-.15	.25**	.28**	.23*	.26**	.25**
甘えと不満	.86	35.28	37.11	4.46**			.21*	.23*	.22*	-.41**	.39**	.18
		(5.22)	(5.10)				.22*	.20*	.21*	.17	.22*	.20*
自己顕示性	.83	18.52	16.43	11.00**				.19	.20*	.33**	.20*	.24*
		(2.76)	(2.02)					.20*	.22*	.30**	-.41**	.18
思いやりの欠如	.67	9.18	8.23	5.27**					.21*	-.20*	.02	.11
		(2.00)	(2.49)						.31**	-.33**	.18	.16
わがまま合計	.74	63.44	62.61	0.93 *ns*						.17	.14	.16
		(10.94)	(11.04)							.16	.20*	.19
自己表明の修正能力	.89	21.99	23.44	3.90**							.28**	.31**
		(4.60)	(4.58)								.25**	.33**
他者の表出行動の感受性	.69	27.60	26.07	3.80**								.28**
		(4.58)	(5.31)									.26**
セルフモニタリング合計	.76	48.03	49.99	2.36*								
		(10.24)	(10.36)									

注）（　　）は，標準偏差を示す。上欄の数値は男子の場合を下欄の数値は女子の場合を示す。
*p<.05 **p<.01

Table 6

対人的疎外感を全く感じない群と感じている群とのわがまま尺度得点とセリフモニタリング尺度得点の平均値の差

	対人的疎外感を全く感じていない群（*N*=69）	対人的疎外感を感じている群（*N*=235）	*t* 値
わがまま合計	64.21 (11.06)	62.43 (10.94)	1.42*
	61.72 (10.84)	64.51 (10.50)	2.25**
他者の表出行動の感受性	22.33 (4.61)	23.01 (4.52)	1.33 *ns*
	20.63 (4.78)	23.54 (4.55)	5.49***
自己表明の修正能力	24.37 (5.12)	27.86 (4.99)	6.12***
	26.72 (4.67)	26.97 (5.10)	0.44 ns

注）（　　）は，標準偏差を示す。上欄の数値は男子の場合を下欄の数値は女子の場合を示す。
*p<.10　**p<.05　***p<.01

Table 7

対人的疎外感を従属変数とした階層的重相関分析

男子　*N*=156			女子　*N*=148		
説明変数	ステップ１	ステップ２	説明変数	ステップ１	ステップ２
自己顕示性	-.30**	-.27**	甘えと不満	.08*	.07*
自己表明の修正能力	.20*	.19**	他者の表出行動の感受性	.26**	.25**
自己顕示性×自己表明の修正能力		.01	甘えと不満×他者表出行動の感受性		.12*
R^2	.40**	.41**		.40**	.47**
ΔR^2	.01*	.06**		.01*	.05**

*p<.05　**p<.01